

## 第 16 回「人間を磨く（二）」

\*\*\*

修養としての道徳。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 16 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「人間を磨く」の第二回です。

前回、「道徳」には三つの種類があると申しました。

そのうちの「修養」は個人の問題です。他の人とは関わりなく、自分を鍛えていく、自分を深めていく、自分を落ち着かせていく在り方です。

これは無視することはできません。人間はそんなに強くはありません。何か自分を支えてくれるものがほしい。当然です。支えるものは、普通、家族であったり、友人であったり、あるいは勤め先であったりするのですが、それは他者との関係があるわけです。

そうではなくて、己一人、その場合のことを考えますと、やはりいろいろな思いが出てまいります。もちろん寂しいこともあるでしょうし、楽しいこともあるでしょう。自分の世界というもの人間は持っておりますから、そこで、何かを築くことができる、そういう特性もあります。

己の修養のためには、いろいろな方法があります。

例えば、禅宗に詳しい人なら、座禅。そういう在り方もあります。

旅をしながら、歴史を振り返ったり、様々な人間の営みを考えたりする。それもいいでしょう。

またスポーツに熱中する、そういう生き方もあるでしょう。

そして、やはり本。

本というのは、どこに行っても簡単に自分とつながることができる。そういう良さがあります。

何か一冊をしっかりと読み込む。これも自分を磨く一つの在り方だと思います。

その際、何を選べばいいか。人それぞれですが、これまでいっしょに勉強してきている『論語』。

これはその一冊に値するでしょう。

『論語』を一人読み、考え、反省する、という生き方もまた面白いかと思います。

今回も前回に引き続き、『論語』を読んでいきましょう。あえて長い文は選びませんでした。

この短い文は有名であるがゆえに、一種の諺のようにさえなっております。

お聞きになっていくと、これは『論語』のことばだったのかと、思われることもあるでしょう。

読んでみましょう。

きおう とが  
「既往は咎めず」（八佾第三）

過ぎ去ったことをあれこれ言わない。咎め立てしない。ということです。これはこのまま、よく使われています。

我が国は周辺の国から、あれこれとつつきまわされておりますけれども、「既往は咎めず」であってほしいですね。

有名なことばです。記憶しましょう。

わ みち いちもっ これ つらぬ いっかん  
「吾が道は一以て之を貫く」「一貫」（里仁第四）

自分の生き方、在り方は、ある一つの核心を以て貫いてきた、という人生を振り返ってのことばです。その一、核心とは何であるか。それは『論語』をお読みになって理解していただきたいと思います。

このことばの「一以て之を貫く」から、「一貫」という熟語ができました。あの人は言うことが一貫している、そのように使います。「一貫」のルーツは、このことばです。

かもん は  
「下問を取じず」（公冶長第五）※「下問」目上・先輩の者が目下・後輩に教えを乞う。

「下問」の「下」は下すという。「問」は問い。下すというのは、上から下へ向かってということですから、上から下へ問う、質問する。「上問」はありません。この「下問」というのは、なかなかできません。

関係が上の者は、知らないことを、下の者には、なかなか聞きにくい。しかしあえて、これを訊ねるとするのは、勇気の要ることです。「下問」を恥じない。わからないことがあれば、相手が下の者でも、勇気をもって、しっかりと訊ねる。それが大事だと言っています。

私の経験談を申します。二十歳以上年上の某大学の先生は、二十代学生の私に「加地くん」と呼びかけられました。

そして三十代になり研究者の駆け出しとなった私に、学会でお会いした折には「加地さん」とお呼びになりました。私は戸惑いました。当然、「加地くん」とおっしゃるものと思っておりましたから。

私は戸惑ったと同時に感動しました。なかなかできることではありません。後輩に対して、くん付けからさん付けにするのは。

以後、私は、後輩といえども、あるキャリアを得た人間に対しては、敬意を表するということが人間の在り方だと思っています。いい勉強を致しました。「下問を恥じず」を読むたび、そのことを思い出します。

きしん けい これ とお けいえん  
「鬼神を敬して之を遠ざく」「敬遠」（雍也第六）

「鬼」と言いますと、日本では「おに」といって、怖いものと思うのですが、本来の意味はそういうものではありません。「鬼」というのは、亡くなられた方の姿です。靈魂です。ですから、「鬼」は遠ざけるものではない。

自分の父親が亡くなったら「鬼」です。亡くなった祖父母も「鬼」なのです。

ところが、なにか靈魂というとおどろおどろしいものですから、いつの間にやら「鬼（おに）」という怖いものになっていったのです。本来は亡くなられた方の御霊です。

しん  
「神」。これは人間を超えた靈妙なものです。いろいろなものがあります。例えば、夜が明け

て、太陽が昇るさま、神秘的ですね。これも「神」です。深い山に入って、山の姿が迫ってくるようなさま、これも「神」です。人間の世界を超えたようなもの、それが「神」です。ですから、「鬼」「神」は我々にとっては敬意を表すべきものです。

このことばはこう言っています。「鬼神を敬する」尊敬して、「之を遠ざく」遠ざけるといのは、丁重に扱うという意味です。（遠くに置いて、近寄らない、距離を置くという意味ではない）。

「敬して遠ざく」は、尊敬して、丁重に扱う、ということです。ここから「敬遠<sup>けいえん</sup>」という熟語が生まれてきました。今では、いやなやつだから、敬遠するということのように、意味が変わっていますが、本来はそうではありません。

「鬼」。亡きお方の靈魂につきましては、実は儒教においては中心的な大事な話があります。それは後程お話します。「鬼神」、ご記憶ください。

<sup>みち</sup> <sup>こころざ</sup> <sup>しどう</sup>  
「道に志す」“志道”（述而第七）

「道」これは、これまで申しました通り、他者の幸せのためにという気持ちです。他者の幸せのために働く。これが「道に志す」ということです。個人の問題を超えて、生きていこうということばです。

<sup>げい</sup> <sup>あそ</sup> <sup>ゆうげい</sup>  
「芸に遊ぶ」“遊芸”（述而第七）

「芸」というのは、今日では狭い意味になりましたが、そうではなく、人間が持っている特殊技術を「芸」と呼びます。例えば、果物を特別上手に育てることが出来るとか、木の表面を削って素晴らしい表面に仕上げるとか、そのように普通の技術を超えた特別な、普通でないことが「芸」です。

「芸」には修練が必要です。秀でた技術が必要ですから、当然です。

こういう技術をしっかり学んでいくうちに、上手になっていきます。そこにひとつの遊びが入ってくるのです。

例えば歌の上手な人は、歌を歌っているだけではない。歌いながら、どこかで遊んでいるわけです。わざと調子を変えてみたり、わざと他のことを入れてみたりして歌う。そういうことができる。余裕があるからです。余裕が生まれてくると「芸」だけでなく、遊びが入る。これです。これが「芸に遊ぶ」。これは名人・達人の境地です。

芸に一所懸命なのは普通。最後は遊べるようになる。これが本当の一芸ということでしょうね。

はっぶん しよく わす はっぶん  
「発憤して食を忘る」“発憤”（述而第七）

これはなかなかできないことですね。憤りを発する。これは怒るということではありません。何かをしようと、吹き上がってくるような決意。「発」も起こすということです。「やるぞ」と盛り上がってくる気持ちのことです。

「発憤」して、何かに熱中すると、熱中する方にエネルギーが集中しますから、食べるなんてことは忘れてしまうわけです。

食べることも忘れるくらい熱中しておることが「発憤して食を忘る」ということばです。

確かに、何かに熱中していて、腹が減ったとか、口がさみしいとか言っているのは、まだ本物じゃないですね。本気だったら、食べることも忘れて熱中します。

しかし、なかなかできませんね。

かいりき らんしん かた かいりきらんしん  
「怪力・乱神を語らず」“怪力乱神”（述而第七）

本によっては「怪・力・乱・神」と分けて書いているものもあります。

その解釈は違うと思います。

「怪力」と「乱神」であると考えます。「怪力」とは、人間の力を超えたようなこと、オカルト的な意味です。

「乱神」もそうです。「神」を尊敬するのは良いことですが、自分の都合の良いように解釈すること、これが「乱神」です。

そういうものについては語らない。相手にしないというのが孔子の立場であったようです。

「威<sup>い</sup>ありて猛<sup>たけ</sup>からず」(述而第七)

孔子の様子について述べた、いくつかのことばの一つです。「威ありて」威厳がある。これは普通、恐い感じがして、猛々しいイメージです。ところが「猛からず」猛々しいものはない。

孔子について評したことばです。

これは自然と表れた雰囲気だと思います。猛々しいのはいくらでもおります。さらに威厳のあるものもおります。しかし、「威」あっても、「猛からず」はなかなかおりません。

孔子について、弟子の残したことばです。

「任<sup>にんおも</sup>重くして道<sup>みちとお</sup>遠し」(泰伯第八)

これは、よく使われることばです。ある大きな仕事をする場合、その責任はとても重い。そして簡単には完成しない。完成への道は遠い。だけど、それを止めるということではありません。それに耐えてがんばっていくぞ、ということばです。これも日本人が好むことばです。

「死<sup>し</sup>して後<sup>のちや</sup>已む」(泰伯第八)

これは怖いことばですね。決心して何かをすとなれば、最後までがんばるのであって、それは自分の全エネルギーをかけるのだ。こういう覚悟がなくては、そういう仕事はできないという意味です。

<sup>す</sup>「過ぎたるは<sup>なおおよ</sup>猶及ばざるがごとし」(先進第十一)

有名なことばです。有名というのには、二つの意味があります。

一つは、本当に内容として立派ということ。

もう一つは、誤解されていて、有名ということです。

どういう誤解かと言いますと、「過ぎたるは」オーバーということですね。次の「猶」を飛ばして、「及ばざるがごとし」。オーバーなことはだめであるとするんですね。あれこれし過ぎるのはだめだ、と。これは全く違います。

中心は「猶……のごとし」ということばです。

「ちょうど……のようだ」ということです。「過ぎたる」ということと、「及ばざる」ということ。この二つです。「過ぎたる」は過剰。「及ばざる」は足りないということ。

つまり、「過ぎたる」と「及ばざる」とは同じであるということです。ですから、しすぎてもいけないし、足りなくてもいけない、と言っています。では何がいいかというと、ちょうどいい頃合いである「中庸」がいい、という意味です。残念ながら、わが国では誤解されていることが多いのです。

<sup>しせい</sup>「死生は<sup>めいあ</sup>命有<sup>ふうき</sup>り。富貴は<sup>てん</sup>天に<sup>あ</sup>在り」(顔淵第十二)

人間一生の話として、当然のことです。「死生」は運命が決まっている。人間にはどうしよう

もない。もう一つ「富貴は天に在り」その人が豊かであるとか、ちゃんとした生活ができるかどうかは「天に在り」。

これも運命ということですよ。突き放した言い方ですね。

次は少し長いことばです。

「曾子そうしいわ曰く、吾われ日ひに吾わが身みを三省さんせいす。人ひとの為ために謀はかりて忠ちゅうならざるか、

朋友ほうゆうと交まじわりて信しんならざるか、習ならわざるを伝つたえしか、と」(学而第一)

この曾子というのは、孔子が愛した弟子の一人です。若い弟子でした。その曾子のことばです。

私は日に日に、我が身を「三省」する。「三省」は、三つのことについて反省する、という意味。

また、三をたくさん、あるいは何度も何度もという意味に取って、あれこれと、とか何度も何度も

も反省しますと解釈する人もおります。これはどちらでもいいです。

ただ、後の文に三つのことが上がっておりますので、三つと取っていいでしょうね。

「三省」ということばは、有名な書店の名になってますね。

「人の為に謀りて忠ならざるか」他人のために、いろいろしてあげたけれども、そのときに

「真まごころ心」というものが、なかったのではないだろうか。

「朋友と交わりて信ならざるか」友人と交わった場合、誠の気持ちは十分でなかったのではないだろうか。

「習わざるを伝えしか」半端なあやふやなことを、人に教えたりしなかつただろうか、ということですよ。

この「三省」ということばは有名ですよ。

すなわち、己を省みるということが己を鍛える、と言っています。

今回は「人間を磨く」第二回目のお話でした。